

あの時出会ってから…

常闇ver.  $\beta$

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは篠之宮 椛（しのみや しゅう）に訪れたありえない様な話…

※作者の都合上不定期投稿になってしまいますがご了承下さい。

※作者自身バンドリの知識が足りてない部分がありますがご了承下さい。

# 目次

本編

e p. 0 : 終わりが始まり | 1

e p. 1 : 最初は何だつて辛いもの

11

e p. 2 : 友達は自然に成立する

21

e p. 2. 5 : GWは大変です

36

キャラ設定

主要オリキャラ設定

50



## 本編

## e p. 0 : 終わりが始まり

高校受験…それは所謂中学から自分が望んだ高校に上がる為の試練であり、ある意味洗礼でもある。これ乗り越えた学生が入学を許され、無論乗り越えられなかった学生は入学できない。

「なあ合格だと思うか？」

「知るか、未来人じゃねえんだよ。」

「まあ手応えはあった…かな？」

「合格に決まってるだろ、何故なら…」

「「慢心乙」」

「いや早いな。」

そして俺、篠之宮<sup>しのみや</sup> 椛<sup>しゅう</sup>はちようどその試練の結果を見るべく煩い友人達と早朝から足を都心のA高等学校に向けていた。

今は2月末とゆう事もあり中々に堪える寒さだ、ただ結果の事を思うと少し心臓が落ち着かない。そのせいも少し寒さが和らいでいる感じがする。

「なあ椀はどうだった？」

「何がだ？」

「合格したかどうかだよ、…また聞いてなかったな？」

「すまん朋哉、まあここはノーコメントで。」

「つまんねえの。」

「言ってる、俺はフラグ建てないからな。」

と、少し遅れたがこの友人達についても話しておこう。今俺に話振ったのは五十嵐<sup>いがらし</sup> 朋哉<sup>ともや</sup>、横で呆れ顔してるのが緋<sup>ひ</sup> 柳<sup>やなぎ</sup> 悠里<sup>ゆうり</sup>、さつきバリバリフラグ乱立発言したのが七条<sup>しちじょう</sup> 正紀<sup>まさき</sup>、俺の後ろで苦笑いしてるのが黒石<sup>くろいし</sup> 真緒<sup>まお</sup>だ。まあ朋哉以外は受験とゆう縁で知り合った仲であると言っておく。

「見えてきたぞ、第一校舎前だっけか？」

「そうそう、校門入ってすぐの方。」

「あれだ、まあ見なくても俺は…」

「それじゃおっ先。」

そう言って朋哉は先に校舎に向かって走り出す。

「何故走る…」

「あれでコケたりしないかな。」

「ナイナイ。」

そう談笑しながら校舎前に集まる人混みを掻き分けて目の前に大々的に貼られた合格番号の貼り紙を見る。周りでは喜びの声や悲しみの声が飛び交っている中4人で一覽に目をやる。

だが違和感を感じた、今一度自分の手元のメモに書かれた番号を見る。やはりだ、俺の数字と同じ番号は、存在しなかった。

直後横の3人を見る、一瞬あまり考えてはいけなない期待を抱いた自分がいたがそれを振り払い3人の吉報を信じて眺める。すると悠里がふと口を開いた。

「お、あった。」

「僕もだ。」

「やはり見るまでもなかったか…」

そう言い揃って3人は胸をなでおろす。続いて何処からか現れたのか朋哉が3人に歩み寄る。

「おーい、どうだった？」

「僕らは合格、朋哉は？」

「合格した合格した、椋は？」

と、言って次第に4人の視線が俺に向く。そうゆうオチですかなるほど…そう思うと

自然に俺の口は少し重くなっていた。

「えっと……これは……」

「見せてみる。」

と、言つて悠里が俺のメモを覗いて貼り紙に目を向ける、直後俺を睨みながら

「あつ椀お前……」

「……すまん。」

「今日最終日だぞ！今日ミスつたら……」

「まあまあ、まだ他の結果があるだろ。」

そう言つて悠里が咎めようとするが間に察したのか真緒が入る。

「はあ……他の結果は？」

「確か今日の午後。」

「午後か……一旦飯食つてからだな。」

「そうだね、それまでやる事ないし。」

「手続きを親にL○N Eして頼まないとな……」

「椀、昼は食べたいもの奢るよ。」

「ありがとな。」

そう話しながら真緒と悠里は俺を励まそうとする、



「あ、俺ラーメン大盛りで。」

「同じく」

…朋哉コイと正紀ツラを除いて。

ただ俺もこの不合格もあってこの後の結果を思うと正直あまり励まされた実感がかつたのが正直なところだが今は気を取り直して次に備えよう、でないとは色々辛い。

…数時間後…

—羽丘学園付近—

「どうだった?」

「あ、あつた…」

「ふうく、やつとか。」

そう言つて悠里は緊張を解き校門の壁に寄りかかる。他の3人もそれに続く様に安堵の息を吐く、俺も今までの2つの合否を見てきたがここでようやく合格が出て膝が笑っている、多分人生で初めてここまで安心した事はないと思う…多分。

「さて、帰るか?」

どれ位経つたろうか? 朋哉のその一言を聞くまでかなり時間があつた様に思える、とりあえず頭を軽く縦に振り動き出した朋哉に続く。すると正紀が突然口を開いた。

「だがこれで柵は我々とはかなり別々になってしまふな。」

その言葉に空気が固まった、直後悠里が正紀の足を踏みつけ正紀が蹲る。すると続くように朋哉が口を開く。

「確かに：お前コミュ障だもんな。」

「コミュ障ゆうな、人との関わり方が不器用なだけだ。」

「それをコミュ障って言うんじゃないのかい？」

「：とにかく！大丈夫だから、また休みとかにでも会えるしな。」

「ほう：あと、お前だけ共学だからって抜駆けはなしだからな。」

「はいはい、分かっていますよ。」

「朋哉、こいつ多分裏切るぞ。表情的に。」

そう言つて談笑しながら足を進める。

ただ正紀の言うとおりこれでコイツらとは一気に会いづらくなる。皆は都心近くの男子高に、俺はそれとは180。逆の地元の高校に：そう考えると確かに寂しくなる：とゆうか1人です。

え？他に友達はないよ、ハッキリ言つて真に友と呼べる存在は多分コイツら位のものだ。確かに今俺のスマホのデータには他にも同級生の連絡先やLINE垢はあるが全く話さない上稀にだが勝手に消えている事もある、つまる所ボツチなのだ、多分。

「…う、じゃあな。」

さて、そう考えると一人でどうやりくりしようか…

「なあ椀。」

「何だよ。」

そう言つて朋哉を見やるが違和感に気づく、他の3人がいないのだ。まあ大方俺が考へてる内に別れたのだろう。もう慣れた事だがよく俺は置いて行かれがちだ、まあ原因はこの治る気配のない癖なのだが。すると朋哉が軽く咳払いをする。いけないいけない、またやる所だった。意識を現実に戻す。

「悠里達なら帰つたぞ、それで実際どうするんだ？マジでボツチになるぞ。」

「分かつてる。」

「いや、回答になつてないぞ…」

「まあ手くやるよ。」

「いやだから…」

「とゆうか心配してくれるのはうれしいがお前こそ俺抜きで頑張れよ。」

「お、おう…?」

そう話している内に十字路が見えてくる、すると朋哉が足を止めて俺を見る。

「まあ何かあつたら連絡しろよ、話くらいは聞かせてくれ。じゃあな。」

「おう、じゃあな。」

そう言つて朋哉は十字路を右に、俺は左に曲がる。4月からはこんな風に別れたり出会う日常がなくなる思うと改めて寂しく感じる。ふと空を見るともう結構な時間外出していたらしい、空は橙色に染まっていた。さて、帰ったら親に連絡と夕飯の支度でもしようかな…

〜 権帰宅中〜

「ただいま。」

そうゆうと奥から床を荒く踏み鳴らす音が聞こえた直後玄関に腰上まで伸ばした青い艶のかかった黒い髪と右目の泣き黒子が目立つ少女、俺の妹、篠之宮楓かえでが姿を表す。

「おかえり〜、権兄しゅうにい。結果は？」

「ん、羽丘学園に決まり。」

「あれ、A高校は？」

「落ちた。」

「他の皆は？権兄が落ちたって事は皆落ちたの？」

「いや逆だ、朋哉達は受かった。」

「え、権兄ダサ…」

「聞こえてんぞ、てかこんな時間までポテチ食つてると太るぞ。」

「余計なお世話です。にしても権兄が羽丘かく私も羽丘にしようかな。」

「お前が居ると俺の輝かしい高校生活が狂うから来んな。」

「うん、羽丘にしよう。決定。」

「お前な……」

我が家……二階建ての黒い門が目立つ一軒家の我が家には、今は、俺と妹しか居ない。俺と妹以外は大体海外に出ていて全く連絡がない、寧ろ俺達からしないと全く連絡が取れないのが実状だ。

荷物を上着を自室に置いてスマホを開き家族全員宛にメールを打つ。

、高校は羽丘学園に決まりました、手続き等をお願いします、

文面を軽く確認して送信をタップしスマホを閉じて机に置く。するとリビングから楓の声が響く。

「権兄、夕飯何作ろつか？」

あいつさつきまでバリバリ菓子食いまくってたろ……部屋を出て下に叫ぶ。

「今日はカルボナーラな！」

「了く解。」

この時俺は知らなかった、俺の高校生活があんな事やこんな事になってしまおうとは…  
…いや全く知らないんだが。

## e p. 1 : 最初は何だつて辛いもの

「椀兄しめうにい！そろそろ行こうよ〜！」

「はいはい。」

階段下からよく聞く妹の声を聞きながら学年カラーの青いネクタイを締め、灰色基調のブレザーを着てバックを持つ。下のYシャツが新品な所為か袖口や布が固くて少し違和感がある。

と、まあ感慨深くしていると下の誰かさんからまた催促されるので急いで下に降りる。

「すまん遅れた。」

「はいはい、じゃあ早速羽丘学園にレッツゴー♪」

（なんでお前がテンション高いんだ…）

「それは椀兄がそんなへそ曲がりさんだからだよ〜」

「さいですか…終わったら校門前にいるか連絡しろ、いいな？」

「了解です。」

そう言つてドアを開ける、すると一月前とは打つて変わった春らしい暖かい光が俺達

を照らしていた。

「そういえばお父さんから連絡あった？」

「まだないよ、そろそろ（返信期間）記録更新だ。」

「そつかく、まあ何時もの事だね。」

「そうそう、何時もの事。」

そんな他愛のない会話を続けながら鍵をかけて住宅地の道を抜ける。

ん、両親の話は聞かないでくれ、話すと少し長くなる。

と、そんな事を思っている中あの十字路に差し掛かる。

一瞬…本当に一瞬だが彼奴が来ると期待し反対側を見つめるが無論彼奴は来る影もなかった。アイツらに「大丈夫だ。」と言っておきながらこんな事だと自分の事ながら先が思いやられる。

そう思いながら十字路を曲がり歩道に出ると少し前を歩く楓がこちらを見る。

「ねえ聞いている？」

「ん、すまん聞いてなかった。」

「はあ…だからね、権兄は部活入るの？」

「さてな、面白そうな部活があったら入るかもな。お前は？」

「私は…今年は何部活あんまり行かないかな、勉強に集中したいし。」



「別に羽丘はそんなムズくないぞ。」

「権兄にはね、私と一緒にしないで下さい。」

そう言つて頬を膨らませる、こんな事言つて良いのかアレだが少し立ち振る舞いがワザとらしいと思う。（あざといと言うのかは分からない）

「まあ良いや、終わつたら一応連絡するね。」

そう言つて手を振りながら歩道を歩き出す、とりあえず返事を返す前に行つてしまったので軽く手を上げて返事をし、それを見届けて近くの横断歩道を渡る。さて、俺は新しい母校に向うとしようか。



自宅から徒歩20分弱、走れば10分弱か15分位だろうか、そんな所に羽丘学園はある。校門を抜けると目の前に広がるサッカーグラウンドや中門を抜けた先の綺麗な中庭、奥に佇む白いコンクリート造りの校舎が目立つのがパツと見の印象かな。…まあぶつちやけそんな珍しい構図でもなく言つてしまえばよくある高校の構図となら変わらないかもしれない。

余談だが道路を挟んで反対側には花咲川学園とゆう高校があるらしい、見たことはいが。

校門、中門をくぐり校舎の前に貼られたクラス表に目を向ける。確か羽丘は中高一貫校でもあるらしくやはり顔見知りが多いのだろう、周りでは和気藹々とした会話が溢れている、それを遠目に見やりながら下駄箱で新品の上履きに履き替えて教室に向かう。

→移動中……

—校舎2F—

「I—B……」か。」

教室のクラス表記を見て扉を開ける、時間的にもまだ余裕があるからだろうまだ席に少し空きがある。

とりあえず黒板に貼られた席に座り周りを見る。まあ名前順なので廊下から二列目だが後ろ側なのが幸いだ、ただ周りの人は相変わらず知らない顔しかない。気の所為だと思いたいがやはり周りからの視線や話し声が心臓の拍を加速させる。(自重しろよ my hart)

うん、とりあえず気にしないで荒野〇動やろう。そうすれば気も紛れる…筈。

さてどのくらい経つたろうか、偶然右隣の席に座った人影を見た瞬間視線を少しそちらに向けた。

いや…一言で言えば苦手な人種だった、天パっぽい髪を後ろで纏め耳付けた兎を模したイヤリングが目立つギャルじみた彼女は席に着くなり周りを見回しだすのを見た直

後に俺は視線をスマホに戻す。駄目だ、あれは関わっちゃアカン人種や。

…あ、死んだ。ちっ、11位か…

スマホをしまい教室の時計を見る。どうやら結構長くやっていたらしい、もうそろそろ担任が来る時間（予想）だ。てか早く来てくれ、そろそろ俺のメンタル的に辛くなってくる。

「ねえねえ。」

ふと、横から声が出た。まあ声的に隣の彼女だろうか、少し横を見ると彼女は俺の方に椅子を傾けて興味深そうにこちらを見ている。

どうする…? ?とりあえずテキストに反応しておくか。

「何?。」

すると反応があつて安心したのか彼女は一息吐いて再び口を開いた。

「いやさくずつと話してないから気になつてき、君新入生?。」

「まあね…だから?。」

「だからつて…まあ何も無いけど、でも1人いるよりは良くない?。」

「はあ…まあたしかに。」

「でしょ?アタシ…」

そう話し始めた直後教室の扉を開けて俺とそんなに変わらない位の若い女性が入つ

て来る。すると一齐に教室が静かになり席を立つ、ようやく担任のお出ましのようだ。

「おはようございます、このクラスを担当する〇〇です。…」

そう言い終えると入場云々の話をして生徒を促しゾロゾロと教室を出る、俺はそれに紛れる様に教室を出て列に並び促される様に体育館に向かった。

途中何度か彼女から来る視線が気になって仕方なかったのはここだけの話だ。

閑話休題、無事に入學式は終わり再び教室での担任からの話や連絡等を聞いて今日そこまでとなった。

そして俺は逃げ出す様に教室出て昇降口を通り校舎を出る。

…とゆう予定だったのだがそれをさせないかの如く隣の彼女の声が足を止めた。

「ねえこの後暇？」

いやコイツ躊躇なく見ず知らずの他人にその言葉を言えるな、俺一応男子だぞ。とりあえず楓の事もあるし、断っておこう。

「いや、人を待たせてる。」

「そつかくあ、アタシ今井リサ。よろしくね。」

「篠之宮椋、よろしく。」

「じゃあアタシ友達のとこ行っちゃうから、じゃあね〜」

そう言つて彼女は去つて行つた、まあ今後も関わつて来る様なら適当に答えて流すだ

けの話だが。

とりあえず彼女が去るのを見やりながら俺は下駄箱に向かう、移動中にスマホを見たがどうやら楓はもう校門前まで来ていているらしい。待たせるのもアレなので早足で校舎を出て校門の端の壁に寄りかかる楓に声をかける。

「待ったか？」

「結構待ったよ、もう帰る？」

「帰る、自宅が一番だ。」

「あ、入学式どうだった？上手くやれそう？」

「今は話したくない、とつとと帰るぞ。」

「はいはい、じゃあ後でね。」

少し不満そうな顔をした楓をよそに早足で帰路に着く、その後今日あった話を楓に話して呆れられたのはまた別の話だ。



教室を出て廊下を見渡す、すると丁度階段を降りる親友の後ろ姿があった。駆け足で近寄り声をかけてみる。

「友希那、アタシを置いてかないでっつて。」

そう言つて笑いかけるが親友は眉一つ動かさずにこちらに目を向ける。

「あら、貴女が他のクラスメイトと話していたから問題ないと思つただけど。」

「だからつて置いてかないで欲しいな〜」

「そう、ならごめんなさい。」

「でさ、友希那はこの後暇？近所に新しいアクセのお店出来たから一緒に見に行かない？」

「いいえ、ライブの準備があるわ。」

「…そつかく、じゃあアタシは帰ろつかな。途中まで」

アタシの親友はあのことからずつとこんな調子だ。まるで何かに囚われた様に没頭し、あまり一緒に出掛けたりして遊ぶ事も少なくなつたし、最近は笑う姿もあまり見ない気がする。



— 駅前周辺 —

「でさ〜隣の男子が凄い緊張してたから…」

「ねえリサ。」

「ん、何？友希那。」

「別に：無理に合わせなくても良いのよ？」

「いいっていいって！別に気にしないでいいよ、アタシが好きでやってる事だからさっ  
！」

そう答えると友希那は少し戸惑った様な表情をする。

「そう、なら良いのだけど…」

「それじゃあね〜」

「え、ええ。」

そう言つてアタシは少し早足で帰り親友の家の隣に建つ我が家の扉を開ける。する  
と奥からお母さんが顔を出す。

「あら、リサ遊んでくるんじゃないの？」

「ん〜、みんな忙しい見たくてさ。だからまた今後だつてさ。」

「そう…ねえリサ。」

「無理しちゃダメよ？」

「え、急にどうしたの〜？」

「だつて少し辛そうな顔してるもの。」

「え？あ、あはは〜アタシ疲れてるのかな？じゃあちよつと部屋で休んでるね。」

そう言つて二階の自室に入りベッドに飛び込む。疲れてるかく、アタシそんな顔に出

てたのかな…まあその理由は分かっている。恐らく親友の事かな、変わっていく親友の事を考えるとモヤモヤが止まらない。どうやってアタシは変わっていく彼女についていけばいいかな…そう考えながら仰向けになって天井を見つめる。

ってなんでこんなネガティブになってるんだアタシ！しっかりしなきゃ！

そう思っただけを軽く叩く、しっかりと友希那の為に何かアタシに出来る事を見つければいいんだ！

そう思いベッドから起き上がる、まずは音楽の勉強でもしようかな…何処からやれば良いんだろ…(汗)

↳ t o b e c o n t i n e d … ↳



## e p. 2 : 友達は自然に成立する

、今日で学校が始まって二週間弱になります。が授業中の雰囲気はまだまだ少し騒がしく、先生からの注意があまり減った感じはしません。…

ふと時計を眺める、針は4時半を指していた。もうこんな時間か…そう思いながら視線を周りに向ける。

時間相応に教室は普段白いのもあり赤みがかつた橙色に染まっていた、外からはグラウンドで部活に勤しむ声と橙色の街が視覚・聴覚で感じ取れる。余談だが夕日とゆうのはどんな景色もたちまち美しいものに化けさせる万能な素材だと思う。

そう思っていると教室の引戸の開く音が聞こえ、続く様に彼女の声が静かな教室に響いた。机の上に広げた日誌に目を戻しシャーペンを走らせる。

「おーい、日誌書き終わった〜?」

と、彼女…今井リサは言いながら目の前の席に座る。

「もうすぐ書き終わる、少し待っててくれ。」

「了解、って字細かつ!よくそんなに沢山書けるね〜。」

「別に普通だろ。とゆうより、前の日直は書かなさ過ぎなぐらいだ。」

そう言つて分厚い日直日誌を少しめくり前のページを見せる、そこには面倒事をさつと済ませたいとゆう意思を感じ取れる前任の日直達の痕跡が残っていた。だから最近の学生は語彙力が云々言われるんじゃないやなからうか…

それを見て彼女も合点がいつたらしく、少し苦笑する。

果たしてこれを日直日誌と言つていいのだろうか？まあ別に中学から見慣れた事なので気にはしてないが。

彼女は再び俺に視線を向ける。

「今日はゴメンね？ 椋は今日別に日直じゃないのに…」

「別に気にすんな、今井さんが悪いワケじゃない。…よし、ほれ。」

最下段半ばの所でシャーペンを止め、彼女に日誌を渡す。今井さんはそれを受取り机と向き合い始める。

さて…そろそろ何故今この様な状況になっているのか説明しようか。(今更)

———

———

—教室—

入学式からそろそろ2週間経つだろうか……？まだまだ学校の中庭にある桜が散る様子は見えない、まあ見ている此方はとても心が和むのでまだまだ散つて欲しくないが。現状？まあ雰囲気には慣れてきた、とだけ言つておこう。話し相手は一向に増えず隣の今井さんぐらいのものだが。(まあ話し相手とゆうよりは彼女の話を一方的に聞いて答える様な感じになっている)

「あ、おはよう、椛。」

と、噂していれば何とやら、彼女のお出ました。

「おはよう、篠之宮さん。」

続くかの様に今井さんの隣から彼女とは正反対の落ち着いた口調で紫がかつた銀色の長髪が特徴的な少女が目を向ける。

「おはよう今井さん、湊さん。」

そして彼女が湊 友希那、今井さんの昔からの友達らしい。にしては親友とゆう関係に持つ俺の印象からは少し離れている気がするがまあ本音を言うと彼女とはあまり話した事はないのでよくは知らない。今井さん抜きだとお互い無言になるのでなんとしようもない。別になんとかする気もないが。

とまあ彼女の紹介をしている内に何故か二人は人の目の前で当たり前前のように話し始

めた、ナンダコイツラ。

「じゃあ友希那今度一緒に楽器店行かない？」

「…週末で良いなら。」

「オツケー、週末ね。」

…とゆうか今井さんはよく話しかけられるな、誰かさんとは大違いだ。

「ねえ椀も来る？」

ん、今何と言ったコイツ。

「何が。」

「週末に楽器店行くけど椀も暇なら行く？」

「忙しい、二人で行って来なよ。」

「そつかり、じゃあまた今度ね。」

「あ、ああ。」

と他愛ない会話の最中チャイムが鳴り響き教室に担任が入ってくる、何時も通り起立して礼をし席に着く。そして何時も通り俺には全く関係しない話をして終わるのだから…：そう高を括って全く反対にある窓を眺めていた。

「今日…：欠席だから…：篠之宮さん。」

ああ…：桜が綺麗だな。そうだ、部活は楓にならって美術部にしようかな…：前は運動部

に居たがロクな思い出ないし丁度良いし、

「篠之宮さん！」

ふと、意識が教室に戻る。

「はっはい、何か？」

そう答えると周りからクスクスと煩わしい声が出たが気がせず担任に目を向ける。

「何かじゃなくて…今日○○さん欠席だから今井さんと日直やつてくれないかしら？」

反射的に隣の今井さんに目をやる、それに気付いたのか当の本人も申し訳なさそうな顔をして俺を見返される。

とゆうかそうゆうのは横の人とかじゃなくて一つ後ろの出席番号の人に任せるものじゃないのか…？

とにかく担任からの頼みだ、断る権利は一分たりもない。しょうがない…

「分かりました。」

「じゃあお願いね？」

—————

———

1

…と、大体こんな流れだったか。

そんなこんなで今日は一日今井リサと日直の仕事をこなさせられている。

「椛はもう学校慣れた？」

不意に彼女が呟く。

「慣れた。」

「部活とか入るの？」

「どうだろう…よく決めてない。」

「ふくん…じゃあさ、ダンス部とか興味ある？」

「興味ない、とゆうかダンス部って男子入部はアリなのか？」

そう返すと少し頭を傾げる。

「まあ～問題ないんじゃないかな？」

「分からのかいな。」

「あはは、じゃあ今度調べておくね～。」

そう答えるとうとう彼女も話すネタが尽きたのだろうか、教室が静まりかえり外の声と他の教室の微かな音だけが聞こえてくるようになった。

「…」

「…」

…こうゆうのを気まずい空気とゆうのだろう、その場しのぎにポケットにしまつてあ

るスマホを取り出そうと考えたが愚考に思えたのでその考えを切り捨てる。チラリと目を向けると頑張って話を振っていた今井さんも少し顔を歪ませているのが分かる。

さてどうしたものか…と、考え始めた直後ある考えが過る。よぎる

入れ知恵だが他にやる事が分からない、席を立つ。

「まだかかりそうか？」

「うん…もう少しかかるかも。」

「そうか。」

「別に待つてなくても良いんだよ？後はアタシ一人でやるから…」

「いいから書いてろ。」

適当に返して席を立ち教室を出る。さて、アレは何処だったかな…



くとある休日…

「親切過ぎる奴？」

そう言つて朋哉は特大ナゲツトを口にほおぼる。

「ああ、所謂お人好しみみたいな奴。」

「はあ、凄いの絡まれたな、お前。」

そう言つてニヤニヤしながらストローを啜える、「お前は食べるのを一旦止めて話を

聞く気にはならないのか」と言いたくなるが聞いてもらっている立場なのでここは口をつぐむ。

「…でだ。」

「はあ？」

「こうゆう奴つてその…どうすれば良いんだ？」

「いや、別に大丈夫じゃないのか？ 権に悪影響はないだろ。」

「いや、追っ払うとかそつちじゃない。上手く関わる方法だ。」

「ああ、そつちか。」

「そつちだ。」

「まあ話しかけられたらしつかり反応してやれば良いと思うが…あ、これならどうだ？  
…



階段を登りそれらで埋まった片手の指先を上手く使い教室の扉を開ける。中では相変わらず日誌と向き合う彼女が俺に気付いたのか顔を向ける。

「あれ、何処行つてたの？」

「下に行つてた。」



「下?」

「書き終わったのか。」

「今さつきね。あれ?それ…」

「まあ普段からの礼とか…そんなだ。」(渡す口実考えてなかった…)

彼女に紅茶の入った小さなペットボトルを渡す。朋哉曰くちよつとした機会に何か奢れば良いのでは?とゆう事だが…

当の渡された今井さんは目を丸くして俺を見つめる。流石に相手が相手だ、馴れ馴れしいと思われたかな…そう思った矢先に彼女は笑みを浮かべた。

「ううん!アタシこそ手伝ってもらって何か奢るべきなのに…ありがとね!」

「…ああ。」(あ、誤魔化せた。)

「あれ?もしかして照れてるな?」

「別に何時も通りだぞ。」

「ホントに?耳赤いよ?」

「赤くても別に俺は普段通りだ。」

「ふくん…まあいいや♪少し休もつか。」

そう言つて今井さんは渡した紅茶を少し口に含み軽く息を吐く。俺もそれに続く。

「今度何か奢るね♪」

「ん、…別に良い、こつちが勝手にやっただけだし。」

「ならアタシが勝手にしたいだけだから椀が気にしなくていいよ。」

「…今井さんって稀にお節介とか言われたりしてないか？」

「え？ん、言われた事ないなあ。」

「さいですか、今井さんはよく他人に躊躇いなく話しかけられるな。」

「そうかな？別におかしくないと思うけど…」

「少なくともこんな奴に話しかけてくる時点で変わってる。」

「そう言うのと彼女は少し驚いた顔で俺を見る。」

「ええ…椀ってやっぱり昔から一人だったり…」

「、やっぱり、って何だやっぱりって、別に友達はある。この学校に居ないだけの話だ。」

「へえ、そう言えば前は何処に行ってたの？」

「ここから電車で少し行ったトコにある男子校。」

「男子校か、前に友達に誘われて行った事しかないなあ…やっぱり羽丘とは違うよね？」

「別に雰囲気とかそんな変わらない、ただちよつと男子が減って女子が増えただけ。」

「そう言えば椀の友達は皆何処に？」

ああ…この流れは…

「皆一緒に都心の方の男子校にな。」

「どうして？一緒に行けばよかったのに…」

口が固まる。別に黙っても良かった、嘘を吐いたって良かった、はぐらかすのも考えた、だけどそれは少し無理があった。多分、俺の短い人生経験から考えるに彼女は多分この手の話では誤魔化せない気がするのだ。それに…

「椀？」

なにより彼女の俺を見る心配そうな視線が嘘を吐かせてくれそうにない。他人にこんな目を向けられるとなるとホントにこの先が思いやられるな…

軽く深呼吸する。

「行きたかった、合格出来たらな。」

「そっか…なんかゴメンね。」

「気にすんな、俺の問題なんだし。」

時計を見ると5時半を回っていた、随分話し込んでいたらしい。いつの間にか寄りかかっていた自分の机から離れて荷物を纏める。

「もうそろそろ閉めよう、そろそろ帰らないと怒られる。」

「えっ？ホントだ！」

彼女も察したのか席を立ち荷物を持つ。

「鍵よろしく！アタシは日誌返してくるね〜！」

と言つて今井さんは教室を勢いよく出て行つた。とりあえず壁にかけてある鍵を持つて教室を後にした。

―校舎出入口―

昇降口を抜け出入口の重い扉を開けて外に出る。外は少し夜空の色に染まりかけた空が広がり、少し前まで賑やかだった校庭も静まりかえっている。さつきも話したが、夕日はどんな景色も綺麗なものにする、とゆうのはやはり強ち間違いな話ではないと思う。いや、あくまで個人的な意見だけだな。

「あ。」

そう思いながら校舎を後にすると目の前の見覚えのある…さつきまで一緒にいた人物がいた。

直後あちらも俺に気付き手を振る。

「いたいた！遅かったじゃん、なんかあった？」

え、遅いの…？別に普通だと思つたが…

「何も無いよ、この短時間で。」

「そっか、じゃあ一緒に帰ろ？」

「おう。」

そう言つて歩きだした今井さんの横につく。

少しして、今井さんがふと気付いたように言葉を洩らした。

「ねえ椀。」

「？」

「アタシは椀の味方だよ。」

「はあ？」

いかん、素が出た…とゆうか突然何を言いだすんだコイツ。すると突然今井さんは少し焦つたように次々に言葉を並べ始めた。

「い、いや！何でもない！変な事言っちゃったよね？別に気にしなくて良いからっ！」

なんだ、そうゆう事か…意外に変なトコで気遣うなコイツ。

「ああ、とゆうか今井さんはそうゆうのを付ける必要はないしな。」

「…え？」

「今井さんは誰にでも等しく関わるから味方にしか属さないとと思うぞ？」

「そ、そうなの？」

「だから気にしてなくてもいいし、そのまま良いと思う。」

「そ、そっかく皆の味方かあ…」

そう言つて今井さんは黙り込んでしまふ、まあ一意見だが本人にも引つかかる所があるのだから。俺は喋らず真つ直ぐ帰路を進む。

「じゃあ椀は一人じゃないね♪」

何時もの横断歩道が見えてきた所で彼女はそう言つた。

「？」

「だつてアタシは椀の味方でもあるんだよね？」

「さあ、どうだろう。今は判断致しかねる。」

「ええ〜っ！じゃあさつき言つた事と矛盾してるじゃん！」

「まあたしかに。」

「そこは少し否定してほしいなあ…」

「俺こつちだから、じゃ。」

「え、あ、うん。じゃあね〜」

彼女が手を振つてくるので軽く振り返して歩みを早める。

「椀は一人じゃない」とか、ハナから今井さんが取つ掛かつてきただけの話で…あ、屁理屈ですね、はい。

とりあえず「何事も慣れない内はこんな感じだ」と、頭に言い聞かせて歩き続ける。

ただ何時もより身体が軽く、ほんの少しだが軽くなった気がした。

良い出会いってこうゆうのを言うんだらうか、いや多分そうなのだらう。

…難しいな、友達って。

## e p. 2. 5 : GWは大変です

突然、一昔前の電話の音が鳴り響き静まり返った部屋の静寂を打ち破る。

「んん…」

手探りに枕元に投げ捨てられたそれを弄り再び部屋が静まり返る、同時に倦怠感に襲われている上半身を起こし再び枕元のそれに手をのぼし電源を点ける。

「今日は…何もなしと。」

電源を切り足をベットから床に着ける、春とは言えまだ少しフローリングの床はまだ冷たい。

「んっ…よし。」

少し背中と足を伸ばしながらベットから立ち上がり朝飯だ着替えだとやるべき事を頭の中を巡らせる。

ふと目の前の壁に貼られたカレンダーを見て溜息を吐く、そこには5月の面を広げられていた。





—篠之宮家・台所—

さて、とゆうわけで速いものだがもう5月…所謂 ゴールデンウィーク G Wの時期が到来したとゆうわけだ。

俺の皿洗いをよそにソファで楓が観ているテレビもGWがなんだと騒いでいる、まあ今年は上手く土日が連続した事もあり5連休とゆう学生にも社会人にもありがたい週末になっている、騒ぐのも納得だ。

突然楓が思い出した様に姿勢を変えて此方に目を向ける。

「ねえ、椀兄。」

「ん?」

「今日暇?」

「ああ。」

すると楓は目を煌めかせてソファの背凭れから身を乗り出す。

「ホントツ?」　じゃあ今日は一緒に買い物行こうよ!」

「まあ別に良いが…お前服溢れかえってるとかi…」

「そゆう事は言わないの! そんな事言ってるとう友達増えないよ。」

「余計なお世話だ。」

「それに偶には椀兄も偶には春服増やしたら? 寧ろ椀兄はバリエーションがなさ過ぎだ

よ、何時も似たような服の着回しじゃん。」

うっ…

「だからそれも踏まえて行こうよ！ 椀兄！」

ホントにこう…妹とゆうのは皆こんなモンなんだろうか？

とりあえず今口から出そうだった危ない発言は飲み込み楓に目をやる。

「はあ…準備してこい、後今度少し服を整理しろよ。」

「は…い、約束します。」

「約束だ。」

そう言つて瞬く間に部屋を駆け出しに行った。(いやテレビ消さねえのか)



くりサイド

— ショツピングモール —

♪〜」

友達の話で聞いた新しいヘアアクセの店結構良かったな〜また来よつと♪

今はGWなだけあって人は普段の休日の倍は居るだろうか？これだけ人が居ると良い物が無くなる前に…と、考えて自然と歩く足が速くなっている気がする。

と、考えている内に次の目的地に到着♪

最近流行つてる新しいお店なんだけど連休とゆうこともあり中は沢山の人で溢れていた。まあこの店の服はみんなデザインが可愛くて評判だからこの混み具合も納得だ、実際アタシも結構気に入ってるし。

店内をとりあえず軽く回ってみようかな、と思い店内を軽く巡る途中、一瞬視界の端に映った後ろ姿に思考が固まった。

もう一度それに目をやる。

「…いーこれどうかな？」

「任せる、…アテにするな。」

(あれ…権?)

そこに居たのは最近アタシが知り合った男子、権で間違いなかった。

あの右目の泣き黒子はそうそう見ないから間違いない筈…なのだが疑問が浮かんだ、何故彼が此処にいるのか?まさかソツチの方だったのかな…と、考えを巡らせる。

直後、権の目の前に現れた人物に目を瞠った。

「えー、そこは選ぶトコでしょ?」

(つて、女子と一緒!!)

ちよつと待つて、いやまあたしかに権つて結構顔立ちは良いけど…彼女がいた事に頭

の回転がだんだん間に合わなくなってきた。見間違いと思ひ片目に再び楯の方を見る。

「はあ…じゃあこの赤いアウターは？」

「え、それはない。」

「聞いたいてソレか…？」

「あつ、あの黒いの良さげだな」

「はあ…」

間違いなさそうだな（苦笑）、あの仲睦まじい感じだと。

誰なんだろ…色々な疑問が浮かぶが下手げに詮索とかはしたくないので考えを止める。

うん、今度直接聞いてみようかな、とりあえず今は買い物に戻ろっと♪

そう少し頭に言い聞かせながら衣服探しに集中する…つもりだったんだがある声に耳を疑った。

「あれ、今井さん？」

慌てて後ろを振り返る。

そこには楯が立っていた。



く椀sideく

「じゃあ新商品あたり見てくるね〜。」

「はいよ。」

さて、もう何件目だ？結構な数回った気がするがこれで満足しないってゆうのはやはり理解に苦しむ。

とりあえず店内でただ突っ立ってるのは邪魔になるので店の端に軽く寄り周りを見回す。相変わらずどここの店もこの時期は服のセールやキャンペーンやらで人を引き寄せようとしているらしく沢山の人で溢れかえっている、挙句店の外では同じ考えを持った店から様々なセールの話が飛び交っている。

と、見回す中で見覚えのある人影に目が止まり反射的に声が出る。

「あれ、今井さん？」

そう少し声を掛けると今井さんは一瞬身震いして振り返る。

「あ、あれ〜奇遇だね。どうしたの？」

「いや、休みだから買い物に。今井さんもだろ？」

「まあね〜」

「？」

そう歯切れ悪く答えると今井さんは周りを見回し、俺に向き直して少しニヤニヤしながら話し出す。

「椀く、彼女置いてつちや駄目だよ？」

「え？彼女？」

「あれ？じゃあさつき話してたのは…？」

すると背中に強い衝撃が走り楓が顔を見せる。

「椀兄！これどうかな？」

と言つて楓が白いロングカーデイガンを見せる。家に似たのあるだろ、と言うのは無意味なのだが一言。

「ウチに似たのあるだろ、却下。」

「ケチ。」

「ただその色は好きだぞ。」

「つ…じゃあ、あつち見てくるね。」

そう答えると再び新商品の棚に戻っていった。

…あ、なるほどな、そうゆう事か。

楓を見送り呆けている今井さんに視線を戻す。

「あれは彼女とかじゃなくて妹、今井さんには話してなかったな。」

「へ、へえく妹かあ…てつきり彼女とかなのかと…

「それはない。」

「即答だね…」

横で苦笑する今井さんを他所に服を吟味している楓に目をやる、まあ稀に言われる（悠里と真緒にも言われた）が結構違うのだろうか、まあ性別的に違う方が良いか。

すると楓もこちらに気付いたらしい、俺に軽く手で来るように促してくる。はいはい

…

「どーした。」

「これとこれならどっちかな？」

次はインナーすか、しかもどっちも緑とか…何処をどう判断するんすかね、これ。

「アタシなら右かなく、そっちの緑なら他の服と合わせやすそうだし。」

え、

「なるほど…ありがとうございます。」

なんか納得してるし。

「でもアタシ的にはこの白とかの方が良さそうかな…」

「たしかに、この青いシャツと合いそうですね♪」

「いいね、で下はこれとか♪」

「おお〜」

「…（話しかけづらいし、なんで同調できるんだ…）」

すると花を咲かせていた二人の視線が俺に向く。

「権兄、これ買っていい？」

「え、いや…」

「権〜、ケチなのは良くないぞ〜。」

「そうだそうだ〜。」

そして今井さん、何故ちやつかり溶け込んでるんだ…



―某カフェテリア―

「ごゆっくり。」

そう言つてウェイターは俺達の前にケーキや紅茶を並べて立ち去った。

「いや〜、ごめんね？アタシの買い物まで突き合わせちゃつて。」

そう言つて今井さんは手を合わせ申し訳なさそうな顔をする。

「別にk…」

「色々勉強になりました！ありがとうございます〜！」



そう言つて隣の楓が深々と頭を下げる。てかこの数時間でよくここまで親睦深めたな…妹ながら恐るべし。

「いいのいいの！アタシも楽しかったし♪」

またこれ長くなりそうだな…先にケーキ食べるか…

「でも良いな、権にこんな可愛い妹が居るなんてさ。」

「ん…まあそうかもな。」

「アタシも欲しいなあ…こんな妹。」

「あはは、それはそれで嬉しいような…。」

「でもこう見るとあんまり似てないな。楓は彼氏とか居ないの？」

「いませんよ、とゆうか居たら権兄とは来ないかな…」

「それはそれで聞きたくなかったな」

「大丈夫、何時もこんな感じだから。」

「そうなんだ…」

そう言つて今井さんは紅茶を飲み俺に目を向ける。

「そういえば権はバンドとか興味ない？」

「バンドか…たしかウチに軽音部はなかったろ？」

「いやいや、部活とかじゃなくてライブハウスとかでやる方のバンド。」

ああ…そういうえば少し前にそんな話をしてたな、最近楓からも聞くな、まあここら辺は前からライブハウスや音楽関連の店は多いからな…まあどうせ「けい○ん！」やらの影響を受けたとかそんな感じがするが、バンドか…

「ああー、別に興味ない。」

「そつかく　じゃあ休み明けに学校で聞いてみよつかな…」

「別にそうゆうの詳しくはないがそうゆうメンバーってバンドのオーデイション的な受ければ早くないか？」

「まあたしかにね、今度友希那に聞いてみよつかな…」

「へえ…湊さんってバンドとかやるのか？」

「そうだよ、友希那よくライブハウスでソロやってるんだ、すっごい上手くてさ。バンド組んでみないか今度聞いてみよつと♪」

「はあ…」

「そう言えば椛にはまだ話してなかったしね。」

「確かに、それは初見だ。」

あれ、湊さんって意外にその口の人か。もうちよつとこう…落ち着いた人なのかと思ってたが…人って見かけによらないな。

「じゃあ…とりあえず頑張れよ。」

「ありがとう、権。」

「プツ、権兄なんでそんなちよつときこちないの…？」

「煩い。」

「あつははは 確かに。」

「はあ…」

「この二人どうにかしてくれ…」

「あ、リサさんこの後空いてますか？」

「え、空いてるよ？」

「じゃあ次権兄の服選び手伝ってくれませんか？最近権兄春服乏しいみたいで…」

おい、なんで勝手に話進めるかな。

「いいよ、アタシ一回男子のコーデとかやってみたかったんだよね♪」

今井さんはノリノリだし…もう色々駄目だなこれ。

「権兄、そうゆうワケだから。」

「いやどうゆうワケだ、」

この二人会わせるべきではなかったかもしれないな…ホントに辛い日になりそうだ。

—二時間後…—

「それじゃあね〜」

「ありがとうございました〜!」

「じゃあな。」

それから色々とあり結局空が陰るまで買い物は続いた、時間が進むにつれ今井さんと楓はさらに親睦を深めたいらしい（実際は分からないが）。そのまま連絡先まで交換して今井さんは去って行ってしまった。

え、あの後何があつたか話さないのかつて？

、女子二人（友人と妹）に小二時間マネキンが如く服を着せされ続けられた挙句、結構な額が衣服代に消えました、

これによし。

「いや〜、権兄凄い良い友達作ったね。」

「お前にとつてもな。」

「あんな先輩居るならやっぱり羽丘行こう、決めた。」

「さいですか：それはそうと夕飯の材料買いに行くぞ。」

「夕飯何作るの？」

「ブルコギか回鍋肉か」

「回鍋肉を希望します。」

「分かった、プルコギ肉増し増しな。」

「おつかしいなく、回鍋肉って言った筈なんだけどなく」

「言ってる、ほら行くぞ。」

「はい。」

頬を膨らませる楓をよそに商店街に足を向ける。

「ねえ椀兄。」

「ん、」

「また行くこうね。」

そう言つて今日一番と言えるくらいの笑みで俺を見る。まあ傍から見たら凄い綺麗な状況に見えるかもしれない、が…

「お前とは行きたくない。」

後日楓から数多の仕打ちを受けたがそれはまた別の話だ。

## キャラ設定

### 主要オリキャラ設定

・篠之宮 椛  
しのみや しゆう

学校：羽丘学園高校

誕生日：9月23日

星座：天秤座

身長：173cm

血液型：B型

髪色：青みがかった黒

瞳の色：灰色

利き手：左

○好きな食べ物○

カレー・豆腐・林檎

○嫌いな食べ物○

酸っぱい物・烏賊



○好きな食べ物○

お菓子なら何でも

○嫌いな食べ物○

酸っぱい物

○趣味○

小物作り

○その他特徴等○

・腰上まで伸ばした黒髪と右目の泣き黒子が特徴

・言葉遣いが悪いが根は他人思いで優しい、若干ブロンズ気味

・中学では美術部所属

・高校は羽丘学園に進学希望

・椀の友達とはある程度面識がある

くくくくくく

・五十嵐 いがらし 朋哉 ともや

学校：A男子高校

誕生日：4月8日

星座：牡羊座



身長：169cm

血液型：O型

髪色：赤土色

瞳の色：褐色

利き手：右

○好きな食べ物○

ジャンクフード類・丼類

○嫌いな食べ物○

特になし

○趣味○

ゲーム全般・読書

○その他特徴等○

- ・後ろ髪を伸ばして一つに結っている（文ストの国木田独歩風）
- ・スマホを3つ持っている（理由は不明）
- ・休日はゲーセンに入り浸りが当たり前らしい
- ・身長が他の4人より低いのがコンプレックスになっている
- ・好きな本は「そして誰もいなくなった」



・この5人の中では一番落ち着いた髪型（イメージは刀剣乱舞の山姥切国広）

・真緒と正紀とは幼馴染

・頼まれた事は他人に頼らず一人でこなし、妥協はしない職人肌

・若干飽き性な所もある（趣味がないのもそれ故）

・身内とは離れて暮らしている

くろいしまお

・黒石 真緒

学校：A男子高校

誕生日：7月4日

星座：蟹座

身長：172cm

血液型：A型

髪色：黒

瞳の色：灰色

利き手：両方

○好きな食べ物○

鍋物

○嫌いな食べ物○

干物・佃煮

○趣味○

ピアノ・ゲーム全般

○その他特徴等○

・髪型イメージは文ストの谷崎潤一郎

・父親は和菓子職人で店を商店街で営んでいる

・↑時折手伝う事もあり、本人も和菓子は作れる

・ピアノは興味本位で始め、独学で弾き方を学んだらしい

・あまり意見を言わず、他人優先な所がある

くくくくくく

・七条 しちじょう まさき 正紀

学校：A男子高校

誕生日：5月16日

星座：双子座

身長：174 cm

血液型：A型

髪色：深緑

瞳の色：緑

利き手：右

○好きな食べ物○

チーズ・卵料理

○嫌いな食べ物○

辛い物

○趣味○

ブログ・映画鑑賞（ホラー中心）

○その他特徴等○

- ・襟足を伸ばした髪型をしている
- ・女性的な顔立ちをしており、若干コンプレックスにしている
- ・ナルシストっぽく、且つ他人に対して歯に衣着せない言い方が目立つ
- ・時折映画鑑賞をしてブログで時折批評・感想をしているらしい
- ・他の4人とは違いゲームが苦手